

尻巫女の秘密



文章・カタタタキ多々鷹

プロローグ

「咲彩（さや）が私にお願いしてくれるなんて珍しいね」

嬉々とした声に対し、名を呼ばれた少女は「別に」と返した。人を突き放す冷淡な声音だが、友人の耳には言外に付け足された感謝が聞き取れる。

少女は咲彩の爪を整え、オイルを塗り、その上に彩りを与えていた。慣れた手付きで右手の爪を裝飾して見せる。

「まだ見ないで。左手も塗り終わってからのお楽しみ」

「そんな面倒な事を頼まれたのに、瑞樹はうれしそうだね」

「そりゃあ、あの花宮咲彩が、私にお願いしてくれたんだからさ」

「あの、って私を何だと思ってるんだよ」
作業に入った友人は返事を寄越さず、咲彩は無聊に苛まれることになった。うつかり爪を見てしまわないように、窓の外に視線を移す。

暦の上では秋でも、その日の最高気温は三五度に達していた。倉庫代わりの空き教室では冷房が使えない。窓から吹き込む風は涼しかったが、同時に段ボールや机に積もった埃が巻き上げられてしま

う。
夥しい数の埃は、二人にとってはこの状況を彩る花吹雪に感じられた。

「あつつつい」

下処理が終わったのだろう。

顔を上げた瑞樹の顔には、玉のような汗が滲んでいる。

「瑞樹。ほら水」

「ん」

瑞樹が口を小さく開けた。

「口移しでちよーだい」

「ばーか」

「ぶー。好きな人と一回やってみたいんだけどなあ」

「好き？ 私なんかの？ どこが」

「やっぱ声かなあ。その涼しげで、冷たいんだけどちゃんと優しいって分かる声。

ほら、入学式の自己紹介で、咲彩ってば自分の名前しか言わなかったじゃん？

声を聞いたのなんて五秒にも満たないのに、それだけで私は好きになっちゃったもん」

あ、もちろん顔も好きだよ？

そのなっがい睫に縁取られた冷たい瞳。視線が交わっただけで、体中の神経が支配されちゃうような鋭さとか、クールって言葉の体現じゃないかな！

すらっとした鼻に、柔らかな唇もすっごい好き。その曲線美が一個でも私の顔のどこかにあれば、もつと堂々と咲彩と並べるんだけどな」

「瑞樹だって可愛いじゃん」

「ちーがーうーんでーすー！」

咲彩の顔は、なんて言うんだろ。可愛いとか綺麗とかじゃなくてさ。肌なんかホクロもニキビとは無縁で、なんだろう神秘的って言うのかな。女の人の熱と女の子の冷たい清らかさの温度差で、透き通る皮膚が白く曇ってるみたいなの。

スタイルもすっごいし。あ、でも意外と感度が高いところも可愛、あ、逃げないで。まだ言い足りない、じゃない。マニキュア塗ってないんだから」

「……………」

席を立とうとした咲彩を、瑞樹が手足を使って制する。

咲彩が瑞樹を可愛いと言ったのが嘘ではないように、瑞樹の咲彩に対する仰々しい物言いには何の誇張も含まれていなかった。

瑞樹はよく笑い、その快活な表情が映える目鼻の整った少女だ。彼女自身、その容姿をことさらに誇る事はない。だが、理解はしていたし、巧みに操る表情はあらゆる男の好意を受けるだろうと自負はあった。

そんな顔が、咲彩と並べば途端に欠点の塊に見えてしまう。

咲彩を花とするならば、自分は石も同然だ、と。悪意ある視線には、瑞樹を引き立て役と嘲る向きもあるが、彼女は意にも介さず咲彩の隣に居座り続けた。

「懲りないね、瑞樹は」

「だから、こうやって一緒に過ごせるわけじゃん？」

言い終わると同時に、爪に専用のオイルが塗り重ねられる。

「できたよ。どうかな」

促されるまま爪を見てみると、薄桃色が翡翠と濃紺に染まっていた。爪の根元は濃紺で徐々に色が抜けて翡翠に変わったような、奇妙な色をしている。海の色を模しているのだろうか。

「綺麗」

不意に口を突いて出た一言に、瑞樹は「さすが私」とおどけて見せた。

「じゃあ、お代に私のお願い聞いて貰おっかな」

瑞樹が瞬きをすると、瞳から愉快な友人の色が消えた。

入れ替わるように艶めいた色が瞳を塗り込め、吐息を咲彩の爪に吹き掛けた。両手で包んだ咲彩の右手を自分の頬に触れさせ、上目遣いで視線を交わらせる。滅多に感情を映さない咲彩の瞳が豊かな熱を宿し、躊躇うように動いた。

「い、一時間だけ、なら」

瑞樹は咲彩との距離を一步詰め、互いの唇を重ね合わせた。

「んっ、んじゅっ」

咲彩から、熱と吐息、甘い喘ぎが口腔の中に染み込んでくる。冷たい声も、この瞬間ばかりは苦しいげな色香に冒され、肉のある人間なのだというのが分かった。その声に感じる奇妙なささくれは、あらゆる種の幻滅らしかった。だが、瑞樹はその幻滅さえ愛おしく感じている。罅が金で継がれ、器がいつ

その輝きを放つように、咲彩の別の顔は瑞樹に言い知れない幸福を与えるのだった。

「ふはっ。こういう時の咲彩の声、とっても可愛い」

「ひうっ」

力の抜けた咲彩を床に押し倒し、セーラー服とスカートをたくし上げた。豊かな乳房と尻を覆う下着は、上下でデザインも色も異なっていた。

「咲彩、なんですかコレは？」

「ちよつと洗濯の都合が」

「私と買いに行った物はどうしたのさ！」

「あー分かった、さては他の女のところで脱ぎ忘れたな貴様！」

「あんまり騒ぐと人が来るよ？」

「やっぱり浮気したんだ！」

「嫌、だから違っ、ひうっ！」

乱暴に引き上げられたブラから乳房が零れた。豊かな弾力を誇る膨らみには、桃色の蕾が突起している。瑞樹は片手で乳房に触れながら、先端を口に含んだ。乳など出よう筈もないのに、舌が突起をねぶり歯が甘い刺激を突き立てる。

「瑞樹、やめてっ」

「騒ぐと人が来るんでしょ？」

息遣いは喘ぎ声と変わらず、その声量も抑えが効かなかった。口を開けば、間違はなく漏れた声が

廊下に行く影を呼び止めてしまう。瑞樹が愛撫を続ける内は口を固く閉じるよりなく、希う代わりに身体を振らせるよりなかった。一方の瑞樹は、その艶めかしい身じろぎに昂ぶらせる。

「今日は私はずっと責めでいいでしょ？ 爪、乾いてないもんね」

窓の外では日が傾き、既に平日の放課時間を迎えつつあった。

「あづっ！ ふぐっ、ううっ！」

咲彩が身を震わせ、秘所に触れた瑞樹の指を潮で濡らす。

「またイッチャったね」

「んうっ、ううっ。もう、やめっ」

咲彩が首を振るが、その声はくぐもった音に歪められていた。口に巻き付けられたハンカチが、声を封じていたのだ。手首は制服のリボンで縛められ、机の脚に結び付けられている。

「三時間もヤっちゃってたか。咲彩ったら、縛った後の方が嬉しそうなんでもんね。ねーえ、明日って日曜じゃん。このまま、こっそりここで過ごしてみたり、とか」

「ん？ んううー！」

「ははっ、ごめんごめん」

「うんぐっ！ ぶはっ。悪いけど、この後で仕事があるんだよ」

「バイト？」

「みたいなもん」

「花宮のお嬢様なのに、バイトなんて必要無いでしょ。よく許可がおりたね」

「無断だよ。まあ、家の手伝いみたいな物だけど」

「ふうん。ねえ咲彩、このまま手首のリボンを解かなかったら、どうする」

「怒る」

「さつきみたいに無視して、その口を塞いだら？」

「仕事に行けず、私は家を追い出されて路頭に迷う事になるかな」

「じゃあ私に頼るしかなくなるって事？ 一石二鳥じゃん」

「瑞樹？」

「冗談だよ。私はそこまでイカれた女じゃないもん」

笑いながら、手首を縛っていたリボンが解かれる。

「友達を縛って、無理矢理セックスの時間を延長するくせに、ってあれ？」

「どしたの？」

「下着が、無い」

床の上に散らばっていた服の中から、下着がいつの間にか姿を消していた。瑞樹は聞かれてもいないのに「知らないよ」と告げ、机の上にあった通学鞆を掴み取った。

「あ、私も用事があったんだ。じゃあね咲彩！ また月曜！」

またひと息にまくしたて、教室を出て行く。まだ服を手元に寄せてもいない咲彩は、裸のまま呆然

と瑞樹を見送った。肌の上に滲んだ汗が身体を伝い、指の感触が残る秘所へと流れ落ちていく。

白い肌の上には、愛撫や責められた後が赤く残る。それは決して外目には触れない、跡を残した瑞樹にだけ知れる秘密の刻印だった。

「まったたく、困ったやつ」

不満を呟こうとした声は不機嫌には遠く、口角には満ち足りた笑みが浮かんでいた。

行為の最中はそれどころではなかったが、今となつては身体を火照らせる瑞樹の体温を存分に確かめる事ができた。余韻というにはあまりに鮮明で生々しい感触は、今も彼女の鼓動と調べを合わせている心臓から放たれていた。彼女の肉体が身の内の、より深い場所まで刻まれるのを確かめた咲彩は、満足げに身なりを整え始めた。

第一話

「君が、霊媒師？」

家から出てきた中年男性は即座に笑みを打ち消し、躊躇いがちに咲彩の顔から爪先までを流し見た。黒いセーラー服を纏った、背はそこそ高いが華奢な少女。

セーラー服には金ボタンや、フリルタイがあしらわれている。学校の制服には見えないが、だからといって予想していた「霊媒師」とは思えない装いだった。

男は困惑したように、しばし口を鰹のように動かした。目の下には隈が浮かび、声にも精細がない。大抵の人間なら息を呑む咲彩の顔にも、大した感動を持っていない様子だった。

ようやく眠る時間が作れる、と藁にも縋る思いで掴み取ったのが、自分の子供と変わらない年齢の少女なのだ。落胆も当然と言えたが、咲彩は言葉を足して信用を取ろうなどとは思わなかった。

「花宮咲彩と申します。山の様子がおかしいって、ウチに連絡くれた山橋高山司（やまはしだかやまじ）さんですよね？」

「え、ええ。よく僕の名前を嘔まずに言えるね」

「間違えた名前はそのまま呪いに繋がりがかねませんので。経緯だけ教えて頂ければ、今晚からぐっすり眠れますよ」

「えっと、何から話せばいいのか」

依頼人は事の経緯を、自分も思い返すように語り始めた。思い出した端から経緯を付け足していくので、その説明は時系列が逆転したり脱線を繰り返す。極度の疲労に、自身でも状況を理解できていない事が、説明を難しくしているのだ。そういった状況から獲物に関する情報を仕分けるのも、咲彩の仕事の一つだった。

経緯としては、事の発端は半年前。

村祭りに動画投稿者を名乗る三人組が訪れた。

男達の態度はすこぶる悪く、祭りで閉鎖中の山に入ってしまった。即座に村人が後を追ったものの、男達は五分と経たぬ間に掻き消えたという。

その日の晩から、警察や消防、地元の人間による搜索活動が行われた。さして高くも広くもない山で、男達は遂に発見されなかった。カメラや貴重品、装飾品や服といった品々が点々と山の奥まで続いていたのに、声が聞こえるのに、男達の姿が見えないのだ。

ある警官達は、確かに目の前で声を聞いたと公言して憚らない。

搜索は二ヶ月で打ち切られ、現代の神隠しとして地元紙を賑わせたのも一瞬。

先月から、また男達の声が聞こえたという。

さすがの警察も相手にしてくれず、地元の神主を通じて咲彩が籍を置く協会に連絡が回ったという事だ。

「ふむ。神骸の仕業に違いありませんね」

「カミムクロ？」

「神様の残骸みたいな物ですよ」

海の方こうで信仰を失った神話が、神気に導かれるままに日本へ流れ着き、その土地で名を喪った国つ神と溶け合った物だ。その姿は異形の怪物であり、変質した神気は呪いとなって人の世を冒していく。

そういつた神骸を祓い清めるのが、咲彩の仕事だ。

「では、仕留めて参りますので、報酬の準備だけお願いしますね」

「あ、ああ。報奨金は一〇万円。仕事を終えた際に五万円。残りは効果が確かめられてから五万、だったね？ 神主さんには、三〇万くらい必要だって言われたんだが」

「協会を通さない個人間でのやり取りなので。それじゃ、行つてきます」
手を振り、家の脇から山へと踏み入る。

「あ、君。そんな所から入らなくても、神社から山に入れるよ」

依頼人の声は無視して、そのまま斜面を駆け上がる。

神社から山に入れるという事だが、それでは「順当な入り方」になってしまつて神域まで立ち入る事はできない。獲物が居る神域に辿り付くには、順当ではない入り方が必要となるのだ。

「ふむ。山に入っただけでこれか」

数メートル向こうの民家とは、まるで空気が異なる。川に落ちたような冷気が、身体から生命の熱を奪おうとしているのが分かった。ここは人間が来る場所ではないとわざわざ警告してくれている。

「こうも分かりやすいのに、神域に入つてしまふとは」

行方不明になった男達は、どれだけ愚鈍だったのかと溜め息が漏れる。

『なんじゃ、人かと思うたら仲間かえ』

頭蓋の中に音が鳴り、それは言葉の形を取った。

『おうおう、どことは知れんが花の神統だのお。ほんに見事なもんじゃ』

男とも女とも、老いも若いも知れない。ただ意図だけが伝わる奇妙な音にも、咲彩は平然としていた。神職の間であつても滅多な事では聞けない。この山を守り育てる神の声だった。

「あの、神骸がこの山に居着いてる筈なので、始末しに来たんですけど」

咲彩の言葉は、祝詞と同じ効果を持っていた。

『おお、あの得体の知れん男を祓ってくれるか』

『あれは、やつと生まれた子を取り込んでしもうてな』

『我らが宮へ招き入れよう。どうか、頼む』

頷くと、周囲の景色がぐにやと歪んだ。足の裏が地面から浮き、内臓が逆転するような心地を味わったのも一瞬。歪んだ景色が元の形に戻ると、眼前にはしめ縄が張られた山道が現れていた。

「神域、か」

神に招かれなければ入る事は適わない、山の中に隠された聖域。万が一にも人間が迷い込んでしまえば、たちどころに頭痛や吐き気で動けなくなるだろう。山特有の冷気に溶けている神気は、様々な実りをもたらす一方で害も及ぼす。過ぎた薬が毒になるように、あまりに濃密な神気は、一呼吸で人間の魂や肉体の正しい在り方を壊してしまうのだ。

だが、咲彩にとつてはむしろ過ごしやすい環境と言える。

不意に「りいん」と澄んだ音が耳朶を打った。

神骸の神気に揺れる風鈴の音だ。

なるほど、神骸の近くまで飛ばしてくれたらしい。

「近いな」

風鈴の音色から、神骸のおおよその位置は掴める。

音が強くなる方向を確かめた咲彩は、「忌み鎖（いみぐさり）」と呟いた。

咲彩の影の輪郭が解け、編み上げられた一本の鎖が蛇のように鎌首をもたげる。先端に備えた五本のかぎ爪は、それぞれ咲彩の指の動きと連動して動く。鎖と感覚が重なっている事を確認し、口中に「行け」と呟く。

木々の間をひと息にすり抜けた忌み鎖が、神骸の足を捕らえる。手の中に丸太のような足首の感触が伝わり、咲彩はかぎ爪をしつかりと神骸の肉に食い込ませた。足首のサイズや形状から、およそ神骸の姿は推測できる。

「巨人型、か」

飲み込めるだろうか。

そう内心に重ねた咲彩は、尻の穴が疼くのを感じた。スカートの上から尻に触れ、勝手に大きくなつていく肉の厚みに辟易しかけた刹那。

『ギヤアアア』

神骸の咆哮が大地を揺さぶり、周囲の木々を震え上がらせる。音は何重にも、また複数の音域が入り交じっていたように思えた。今までに聞いた、どの神骸とも異なる奇妙な咆哮だ。強いて言うなら、三つ首の犬の物に似ているだろうか。人型で多頭というのは金輪際ないように思えるが、観音像という例もある。そういう物は腕の数も多く、戦闘面において多大なアドバンテージを誇るのだが、咲彩の表情には少しの躊躇いも無かった。

「仏像の類いかと思っただけ、へえ。西洋の神話のようだな」

不意打ちを行う機会をあつさり捨てて、堂々とした歩みで神骸との距離を詰める。片膝立ちの体勢でも咲彩の倍ほどの体格があった。小屋ほどの体積を誇る化け物は、背中から無数の腕を生やし、同数の頭を備えている。松ぼっくりのような頭に収まる無数の顔が一斉に咲彩へと向けられ、異形の肉体を僅かに震え上がらせた。

頭部には帽子を被った物もあり、行方不明になった登山客だろうと推測できた。その周辺に見える頭の装飾品も、行方不明者の情報と一致する。安っぽい動画のウケを狙って神域に入ったような命知らずだが、ヒトの犠牲者には違いない。

「はじめまして。私は花宮咲彩。君達を祓い清める為にやって来た巫女だよ」

風に揺れる髪を抑え、子供に向けるような微笑を投げ掛ける。殺意も害意も含んでいない少女の笑みは、窒息に似た恐怖を神骸に与えた。鎖で捕らえておきながら害意を見せない得体の知れなさは、刃を突き付けられるよりも恐ろしい。

『グオツ』

五〇ある腕が鎖を一斉に掴み、目一杯引つ張る。神骸の体格に比べれば糸のような鎖だが、表面には引つ掻き傷一つ付いていない。何本かの腕が無防備な咲彩を殴り飛ばそうとしたが、腕はビクとも動かなかった。足首に絡み付いた鎖から染み込んだ霊力が、攻撃の意思を中和しているのだ。

「無駄だよ。私の鎖は特別製でね。神骸ではどうあっても抵抗できないのさ」

動けないのを確かめてから、腰のポーチからスマートフォンを取り出す。

「えーっと、巨人。多頭、多腕。こんなワードで出るかなあ？」

一度で目当ての検索結果が出るとは思わなかったが、画面には眼前に居る神骸と似た巨人族の画像が表示されていた。

「ヘカトンケイル、ねえ」

ギリシャ神話に登場する巨人とある。無数の腕を生かし、ティタン族との戦争ではゼウスの助けとなり、後に冥府の番人になった。大地母神と天空神の子であり、血統も備えた破格の巨人。

「三人兄弟つてあるけど、君はどれだろうね。いや、ここに居るのは神話の残骸でしかないんだっか」

神骸は、神話の残骸でしかない。眼前にあるのはヘカトンケイルその物ではなく、神話と溶け合った土地神だ。本物ではないが、偽物でもない。本物に比べて小柄で腕や頭が少なくとも、人の身を疎ませるには十分な姿である。

「素晴らしい姿だ」

咲彩は艶のある笑みを浮かべ、手近な顔に手を伸ばした。その指は震えていたが、恐怖してはない。

喜悅から来る鼓動の速まりが、指先の震えに現れているのだった。色香の熱に蕩けた瞳に、ヘカトンケイルも抵抗を忘れ呆然としている。

手応えを感じた咲彩は数歩後ずさり、両手でスカートの縁を掴まんだ。

淑女が挨拶するような手付きで、スカートをたくし上げる。丈が短いので、少し動かすだけで覆いとしての機能を失った。籠もっていた熱気が、神気の中に白い靄を作る。靄の中に揺れる肢体が、神骸に困惑の声を上げさせた。

「どうだい？ スタイルには自信があるんだ」

内腿はニーソックスの上に肉感を盛り上げ、股から覗く尻の輪郭は瑞々しい。下着が透かす秘所には体毛が微かに茂り、熱気が神気に色香を匂い立たせている。

「混乱しているな。そうさなあ、これは私なりの勝負の申し出という奴さ」

右踵を軸に、踊るように反転する。

「今から私は、お前に抱かれよう」

尻を撫でながら、神骸に媚びるように腰を突き出す。よく実った尻は華麗に弾み、その瑞々しさも相まって果実を彷彿とさせる。

美味そうだ。

神骸から放たれる神気が、確かな指向性を咲彩の尻に向ける。

「ふふっ、臆は使わせてやれないが、尻の穴なら好きにして構わない。

そのイチモツが果てる前に私を絶頂させれば、お前の勝ちだ。

私に信仰を命じれば、お前は信徒を得て神に戻れる。孕み袋を兼ねた巫女にだつてなつてやろう」
尻を撫でていた右手が、肉を搔き分ける。食い込んだ下着に指を掛けると、交差する紐の間に小さな窄まりが覗いた。尻穴の周囲には紋様が刻まれ、排泄器官でしかない穴に性器の色香を与えている。紋様の放つピンク色の光は、サキュバスが用いる淫紋に似ているが、こちらの構図は梵字に近い。

「さてどうする？」

美味そうな尻肉の間に収まった性器も同然の穴は、神骸の股間に巨大な影を浮き上がらせた。巨大な肉の棒が尻の上に置かれ、咲彩の表情が僅かに強まる。人間と同じ構造をした性器だが、その太さは咲彩の手首ほどもあった。漫画でしか見ないようなサイズではあるが、人間の「雌」を壊さないギリギリの大きさに留めている。

「へ、へえ。随分と弁えたイチモツじゃないか」

上擦った声が、神骸の情欲に薪をくべる。ヘカトンケイルは笑いながら、腕の一本が性器を掴んで咲彩の尻を叩いた。肛門の周囲を亀頭がなぞり、そのまま尻の谷間を縫って腰へと進んでいく。突き入れた際のペニスの深さを伝えているようだ。

「降参するなら今のうち、とでも言いたいのか？」

がっかりさせたなら悪いけど、神骸との情事は初めてではない。この尻穴は、その立派なイチモツも呑み込んでやれるさ」

さらに誘うように、左手でも尻肉を搔き分ける。

「ああ、私が負けそうになったら裏切ると思っているのか。なら心配は要らないさ。さつき勝負だと

言つたらう？

お前が私の尻穴にイチモツを入れた瞬間に契約が成り立つ。裏切れば、この尻に刻まれた紋様の効果で私は強制的にお前の物となる」

十分だ、と言わんばかりにヘカトンケイルの腕が咲彩の肩や腰、腕を掴む。

直後、尻穴のヒダを強引に掻き分けたイチモツが根元まで差し込まれた。

「んづっ！」

痛みと痺れが頭蓋まで衝き上がり、細い身体を痙攣させる。大きな悲鳴や喘ぎ声は上がらない。覚悟していた痛みを誤魔化す為の呻きは、ヘカトンケイルのプライドをいたく傷付けたようだった。

手持ち無沙汰だった腕がセーラー服をたくし上げ、別の腕が乳房を揉む。同時に乳首にも指が絡み付き、荒くなつた呼吸の中に甘い喘ぎが滴り落ちた。

「尻の穴に入れた次の瞬間には乳房に手を出す、か。

乳房を揉みながら乳首を責めるのは、多腕の本領発揮だな。昂ぶってくれたようで、うれしいよ。わざわざブラを外して山に入った甲斐がある……。

んっ、んんづっ！」

ヘカトンケイルの腰が動き始めた。イチモツは尻の穴をみっちり埋めており、性器が動けば咲彩の腰が付いてくる。これでは行為にならない、とヘカトンケイルの腕が咲彩の腰を乱暴に押さえつけた。

「太っいいい！」

呑み込めるとは言っても、さすがにギチギチだから。あつ、動かすのも、あぐつ、大変だな。
っぐん、んっ、んっ！」

既にヘカトンケイルのイチモツは、淫靡な体液に濡れていた。経験豊富な尻穴は、腸液を染み出させ始めている。生殖器を美味そうにねぶる尻穴は、漏れ出る下品な音と相まって口による行為を彷彿とさせた。自分の手で覆い隠され、喘ぎ声押し殺す口よりも素直に悦びを吐露する淫靡な口。

「んっ！」

んうっ！

うっ、ふっ！

うっ、うっ、うっ、うっ！

ふー、ふー！

んぐっ！ んぶっ！

ふはっ。ま、待て！

ひうっ！

あつ、ああつ！」

唾液で滑った手が、ヘカトンケイルの腕に捕らわれる。喘ぎ声も、舌を垂らした無様な蕩け顔も隠せなくなった少女は、しばし突かれるままに声を上げる楽器に成り下がっていた。

「しよ、しよんなに激しくするなあ。この腰使い。お前は今までに相手にしてきたモノと違い過ぎる
っ」

振り向いた横顔。眦から涙が伝うと、ヘカトンケイルの性器が大きな膨らみを尻の中に感じさせた。熱がさらに強く、脈動が咲彩の鼓動にまで溶け、胸を酷く痛めた。射精の予兆に、咲彩は首を振って希うように唇を震わせる。

「もう出すのか？ ま、待ってくれ。降参する。だから、お尻に出すのだけは」
……なんてな。

射精の刹那、咲彩の横顔から表情が打ち消される。

「んっ！」

んんっ……」

尻の中に注がれる精の熱に、咲彩は最後の呻きを放った。尻の中にへばりつく、餅のような粘度を持った精液の感触に微苦笑が漏れる。

「これが臆だったら、問答無用で孕まされていただろうな。

んっ、まだ、出しているのか。この量、精液を喉から逆流させるつもりか？

やれやれ。お前の耳が働く内に、勝負について伝えておこうか」

轟々と流れゆく射精の音に、ピシと高い音が混じった。

「先に果てたお前は、私の中で眠って貰う事になる」

涙に濡れた目の中で、翡翠色の瞳が喜悦の色を宿す。つい先刻まで、琥珀の色をしていた瞳が、今は翡翠となって奥に仕込まれた呪術陣を透かしている。ミクロ単位で織られた数百にも及ぶ呪術の層。その一つに光が灯ると、ヘカトンケイルの身体からガラスの碎ける音が漏れ出した。

「お前の持つ神話の残骸。もらい受けるよ」

ヘカトンケイルの身体に走っていた罫が、性器の先端にまで達した。無数の腕が身体から折れ、地面に落ちて砕けていく。肉体は「神話の残骸」の残量に比例して、徐々にヘカトンケイルの形を喪っていく。

『ひ、ひ』

取り込まれた人間の頭が、恐怖に歪んだ声を上げる。人間の頭で希えば助けてくれるものと思っているのか。或いはこの人間の魂が残っていて、解放されつつあるのか。咲彩には分からなかった。元より、分かるうとも思わない。

「怯えるな。お前達にとつて、肉体など替えの効く服のような物だろう？」

神骸の肉体は実体化した超高密度の神気であり、核たる「神話の残骸」さえ無事なら頭が潰されようと命が脅かされる事はない。それでも、身体が崩壊していく状況は死の体験に他ならず、神をも恐れさせる事象には違いなかった。

なまじ人間を取り込んだせいで、死の恐怖がより誇張されているのだ。

「私の中には、二〇ばかりの神骸が眠っている。

ああ、そうさ。私の誘いに乗った馬鹿共だ。同じ者同士、寂しくないだろう？」

ははっ、そう怒るな。子細を聞く前に行為を始めたのはお前だろう？」

おやすみ。お前の力は貴重だ。存分に使い潰してあげるよ」

その言葉を潮に、ヘカトンケイルの身体が一斉に砕けた。地面に落ちた残骸は神気に溶けて、砂一

粒の痕跡さえ残っていない。自由になった身体を起こし、妊娠したかと思紛う膨らみ方をした腹を撫でる。

「重っ……。はあ、何キロ射精したんだ」

性交を術に神骸を封じ込めるようになって半年。今さら腹が膨らんだ程度では動じなくなっていた。呆然と腹を見る瞳が涙で濡れる。表情を暗くしているのは、どれだけ行為を重ねても薄まらない。むしろ繰り返す度に重たくのし掛かってくる嫌悪感だった。尻の穴から、腸液で薄まった精液が内腿に伝う。

「こんな物が、花宮の姿か。いや、もう花宮って名乗れないんだから、関係ないか」

自嘲しようとして果たせず、食いしばった歯から怒りが漏れる。重たくなった身体がふらつき、傍らの木に倒れかかる格好になった。膨らんだ腹は重心を変化させ、歩く事も困難にさせる。

「さっさと処理しないと、お腹の中で固まっちゃう」

精液の粘度を思い出した身体が、一斉に肌を粟立たせた。

しゃがみ、精液をひり出そうと腹に力を込める。

神域を尻から出した物で穢すのは躊躇われるので、足下には任意の物を呑み込む影穴を敷いた。音については、風に溶けてどこにも届かない事を祈るしかない。

「ふうっ！

んっうう！

あうっ、くううっ！」

排泄しようともがく煽動運動に対して、粘度のような精液は腸壁に張り付き動くのを拒んでいた。確実に雌を孕ませる為の呪力が込められた精液とはいえ、腸と子宮の区別は付かないのだろう。

本来なら、神骸の肉体が瓦解すれば精液や血液なども消滅する。

しかし、神話の残骸を吸収する触媒となったこの精液には、咲彩自身の霊力を注がれており、本体の消滅後もその機能を十全に果たそうとしているのだ。腸液が精液を溶かしてはいるが、その程度で対処できるような量でもない。

革手袋を外し、友人に塗って貰ったネイルを見つめる。

「くそっ」

目を閉じ、両手の指で尻の穴を掻き分ける。熱を帯びた尻の中を掻き分け、半固形の精液を削り掻き出していく。不感の呪術が施されているが、それでも尻の中で指が動き回る不快感、抑えようのない苦悶の声を上げさせた。腸壁に指が触れ、精液が「ぶじゅ」と水気のある音を立てる度に、瞼の裏には、爪を彩る色彩と、それを嬉々として塗ってくれた瑞樹の笑顔が浮かび上がった。

（景気づけ、だったんだけどな）

友人の笑顔への罪悪感。後悔が、こんな状況に置かれるハメになった親族への恨みをさらに強めていった。怒りの熱が、知らぬ間に開かれていた視界を薫らせ、自身を嘲笑していた女達の顔を浮かび上がらせていく。

（花宮の恥さらし）

（子供を産むのが、最後に残された存在価値）

記憶から這い出してくる声は、精液の塊が漏れ出る音に掻き消されていった。

今さら、そんな罵倒に心を煩わせたりはしない。

「ダメだな、こんな大量の精液、出すのに何時間掛かるか知れないや」

腹は縮んでいたが、それでも尻の中には大量の精液が残っている。影を尻の中に突っ込んで精液を強引に吸収するか。乱暴な解決策を実戦しようとした矢先、また神骸の存在を告げる風鈴の音が鳴った。

「神骸、まだ居たのか」

音は小さく、気配も微少な物だ。咄嗟に撃ち出した鎖を、その矮小な気配は華麗に躲けて見せた。

「ほお、忌み鎖が躲されたのは初めてだ。面白い。

鬼蜘蛛！」

咲彩の舌に刻まれた呪術陣が、言葉に呼応して特定の術を顕現させる。咲彩の影が倍近くに広がり、輪郭から八つの細長い脚が染み出す。一秒後には、咲彩の影が巨大な鬼の顔を持つ蜘蛛の姿へと転じていた。

体内に封じた神骸を、自分の影へと降ろす技だ。神降ろしや式神と系統を同じくする呪術だが、これら何時間もの詠唱を要する大呪術とは異なる。

こちらは、体内に封じた神骸を、自分の影を触媒にして呼び出しているだけの技だ。構造は靈力による視角強化や、身体能力強化等の初歩呪術の流用である。

無能力と言われた咲彩が生み出した、唯一無二の技だ。

「鬼蜘蛛」

木々の間に人差し指を向け、静かに命じた。影から一本の糸が生み出され、手近な木の影へと撃ち込まれる。たちまち木々の影が無数の糸を生み出し、周囲八〇〇メートルを囲い込む巨大な檻を作り出した。

「見つけたぞ」

檻と感覚を共有する左目が、森の俯瞰図に赤い点を認める。人差し指を軽く振ると、標的の周囲にある影から無数の糸が飛び出す。逃げようとしたようだが、影のある限り鬼蜘蛛の糸から逃れる事はできない。

獲物を絡め取る手応えが人差し指に伝わると、蜘蛛の影が咲彩の身体を取り込む。糸が繋がった先まで瞬間移動できるのも、鬼蜘蛛の強みである。

正確には、糸と糸の間にこの世ならざる道を作り、肉体の分解と再生を即座行っているのだが、体感で分かる事ではない。

瞬き一つで景色が変わり、眼前には捕らわれた神骸の姿があった。

「髭に小柄。北欧神話の系統かな、お前は」

身体が影に覆われた小人だった。神骸として完成する前の、繭のような状態だ。子細は窺えないが、筋骨隆々とした肉体に、髭を蓄えた顔は輪郭から想像が付く。

ドワーフの起源とも言うべき、北欧神話の鍛冶職人。神話によれば、首飾りの代価に女神に性交を求めたという。性に関する貪欲な逸話を持つ神骸は、咲彩にとっては願ったりの手相手だと言えた。

「お前もどうだい。どこから見ているかは知らないが、関心があるから近付いてきたんだらう？」
スカートをたくし上げ、尻を突き出す。

「さっきの神骸に出された精液が残っているが、だからこそ遠慮は要らないさ。いつそ根こそぎ掻き出すくらい、乱暴にやってくれると助かる。」

無論、私をイかせなければ、お前もさっきの神骸の二の舞になるがね」

『ギヤウア！』

神骸は嬉々として尻に飛び付いた。

尻の紋様による効果だけではない。元より性欲が旺盛な個体なのだろう。

「うぶっ！ うっ！」

差し込まれた瞬間、押し込まれた空気が不快感となって口から悲鳴を上げさせた。覚悟した尻穴を裂くような痛みは、しかし訪れなかった。不快感は消え失せ、尻の中を空気が出入りしている。

（これは、やっているのか？）

振り返ると、尻にしがみついた神骸は景気よく腰を動かしていた。そのサイズは、人間に比べれば十分な大きさを誇っていたが、先刻の神骸に比べれば針のような物だった。尻の中は性器ではなく、往復の度に渦巻く空気の流れを感じ取っていた。

（小さ過ぎる……。いや、さっきのが大きすぎたんだ。人間サイズを入れるのは初めてだが、まさかこんな呆気ない物だとは）

物足りないと感じている自分に嫌気が差し、苛立ち紛れに尻の穴を絞めてやった。行為の途中で性

器が抜け落ち、精液が外に出ては元も子もない。尻穴が性器の根元を締め上げると、途端に熱が腸の中を満たした。

「え？」

規模は小さくとも、射精には違いない。

「まさか……、もう果てたのか？」

イチモツが抜けそうだったから、尻の穴を少し絞めてやっただけで、それだけで、果てたと言うのか」

精液の量も質も人間に近い。小さな身体は、射精を喜ぶように不格好な痙攣で咲彩の尻を震わせている。射精の余韻を味わっているのかと思われたが、神骸は再び腰を動かし始めた。

（また行為を始めたか？）

稀にだが、封印される寸前まで抵抗を試みる神骸は存在する。大抵は二往復程度で性器が身体から千切れるのだが、この神骸の腰遣いは些か事情が異なっていた。最期の抵抗にしては力が強いのだ。むしろ最初の行為よりも、性器の太さや突き入れる勢いが増しており、尻穴を絞めても果てる事はなかった。それどころか、絞められた圧力を楽しんでるように、下品な声を上げ腰を弾ませてくる。

（隷属の契約は果たせている筈だが、妙な具合だな。残骸を吸収しきれなかったのか。神話の残骸を複数所持しているのか、或いはこいつの特性なのか？

何度か射精させてみるよりあるまい。

この程度の刺激なら、どれだけ犯されたところで)

「うっ、うづっ！

うっ！

うぐっ！

うぐっ、ううっ！」

抑えきれない喘ぎが、森の中に響き渡る。山だけでなく、周囲の民家にさえ届いているかもしれない。分かつていても、開きっぱなしの口を閉じる事ができなかった。既に手足からは力が奪い取られ、立つ事もままならない。地面に俯している格好だが、尻だけは神骸の腰の高さに突き出されていた。

「あぐっ！

うああっうう！」

その蕩けた声は、後で聞き返したとしても自分の物だとは分かるまい。

性器が尻の穴に突き入れられる度に身体が痙攣し、刺激に思考が攪拌される。行為の最中はまとも
に思考する事も適わず、射精の瞬間。腰の動きが止まる時にのみ、咲彩は人としての思考を許された。
もはや性行為ではなく、自慰の道具も同然の状況である。

「はあっ、はあっ。なんなのだ、コイツは。これで、七度は果てている筈なのに、なぜ封印できな
い」

射精を終えた神骸が再び腰を動かし始めた。多少は尻が慣れてきたのか、まだ思考の余裕がある。

「不感の呪術を全身に施しているのに、なんだこの刺激。」

はあつ、はあつ。

じゅ、呪術がつ、あづつ！

解かれたなら、そつ、それと知れる筈だ。

まさかコイツ、腰使いだけで私の不感呪術を打ち破っているとでも言うのか！

はあつ、あぐつ、んうう！

んっ！

ああつ！

ひづつ、くうあああああつ！」

思考を断ち切るように、熱と冷気が渾然となった衝撃が尻から脳天までを、ひと息に駆け抜けていった。鮮烈な刺激と、飴のように張り付く余韻。その刺激の名前を咲彩は知っていた。

（嘘だろ、イカされた？）

瑞樹との行為に比べれば、その強さは芥子粒にも等しい。しかし、絶頂させられたという事実は、咲彩の頭を殴り付けるような衝撃を与えた。絶頂の余韻が残る尻穴を、再び肉棒が撫でる。尻の中で滞ってた甘い刺激が弾け、脱力していた身体が魚のようにビクビクと震えた。

（また、イカされる。お尻なんかで、また）

諦めが、むしろ心を平静にさせる。覚悟した刺激は与えられず、ガラスの碎けるような音が耳朶を打った。

(奴の身体が、砕けていく?)

封印に成功したのかと思われたが、そうではなかった。神骸の身体から、闇が剥がれ落ち内包した本体が姿を顕しているのだった。繭の時間が過ぎたのか、自分を絶頂させるのが羽化の条件だったのか。

闇が剥がれ、筋骨隆々とした肉体は光沢のある翡翠色に染まった。頭部に顔は無く、表面を覆い隠す大量の髭が、嘴を備えた独特のシルエットを作り出している。頭頂部には真鍮色の球体が僅かに盛り上がり、その中に髭を蓄えた男の顔が浮かんで見えた。

「この姿。まさか河童?」

緑色の身体に嘴、頭に皿のような器官。水棲の妖怪として有名な、河童の特徴に相違なかった。本来なら天然の沢から離れることはできない種族だ。この近くには、近年やつと整備された河川がある。そこを追われた河童が、運良く岩の妖精たるドウベルクの神話と交わったのだと推測できた。

希有な事例ではあるが、同時に咲彩にとって最悪の相手とも言える。

河童は人間の霊力と魂を集結させ、尻子玉として奪う事ができるのだ。神骸狩りが被害に遭う事は滅多にないが、ただ一度だけ、河童に犯された巫女を見た事がある。尻子玉までは奪われなかったが、二度とまともな人間として活動できないような調教を施されていた。

「ひぐううっ!」

河童が、腰を動かし始めた。性器のサイズも、腰遣いの勢いもこれまでとは比較にならない。河童に所有された巫女の、蕩けた顔が脳裏を過ぎる。口を閉じる事もできず、あらぬ方向を見るよりない

瞳。今の自分は、同じ顔をしているのかもしれない。

(嫌だっ)

無意味に思えた記憶の奔流が、一欠片の抵抗を身体の中に芽吹かせた。投げ出されていた指先が拳を作り、土を舐めていた舌が震える。口に入った泥を勢いよく吐き出し、威勢を駆って口を開いた。「ぐっ、ううあっ。

おい、っはっ、いつまで私を犯すつもりだ。

先に果てたお前は、私の物になっている。それは伝わっているだろう。

んあっ、さっさとイチモツを抜いて、私に従え」

『グギャアア』

喘ぎ混じりの声に、河童は嘲笑を返した。尻を叩き、悲鳴を楽しそうに聞いている。犯され喘ぐだけの雌に従う理由などない。

主従の契約が効いていないのは明らかだった。

(繭の状態で結んだから、引き継がれていないのか?)

今の咲彩に、様子見という選択肢は無い。既に不感の呪術は五割近くが綻びている。全身に張り巡らせていた不感を尻穴に集中させているが、これも長くは保ちそうにない。不感の呪術が消えた状態で犯されれば、間違いなく即果ててしまうだろう。

(もったいないが、しょうがない)

例外も例外の状態ならば、ここで河童を殺しても契約違反にはならないだろう。

河童の処理を、鬼蜘蛛に命じようとして……。

「鬼蜘蛛……かふっ！」

声に先んじて、蜘蛛糸のロープが唇を覆い隠す。口に巻き付いた糸は猿轡となり、そこから舌を絡め取って完全に言葉を封じ込めてしまった。声による呪術が、猿轡で封殺できるのは道理だ。

「んうっ？」

(なんで、鬼蜘蛛が私を)

想定外の不意打ちだが、思考と切り離された身体は新たな呪術を紡ぐ。言葉が封じられても、神骸を操る術は何通りも揃えてある。同時にそれは、鬼蜘蛛にとっても想定外の行為という事だった。

動いた腕が即座に蜘蛛糸に絡め取られ、乱暴に後ろ手に回される。不感の呪術を失った身体に、強引に腕を捻られた痛みが突き抜けていった。激痛が次の行動への猶予を奪い去ると同時に、脚はふくらはぎと太股を束ねる形で縛められてしまう。

河童は尻から性器を引き抜くと、咲彩を仰向けに返した。

精液と腸液に汚れた性器が、下着の上から秘所に触れる。

『ヒギヤッ』

河童が悲鳴を上げ、慌てて性器を引つ込めた。

(何の対策もしてない訳がないだろう)

秘所には、男を拒絶する結界が無数に施されている。神骸も人間も、神でさえも咲彩の秘所を犯すことは適わない。

河童が指を動かし、新たなロープが蛇さながらに咲彩の身体を這い回る。河童の指に呼応して乳房を縛り上げたロープはそのまま股にまで通り、敏感な突起に無数の糸を結び付けた。乳首にも同様に糸が巻き付けられ、生地の上にその形がくつきりと浮かび上がってしまう。不感の呪術が解けた三つの突起は、縛られるだけでも快楽を感じていた。

性器が服の中に突き入れられ、襟元から濡れた亀頭が顔を覗かせる。自分の尻を犯していたペニス
が鼻先まで突き付けられ、精液の淫臭が鼻腔から肺を犯す。嫌悪すべき悪臭にも拘わらず、精液の香りは身体の奥に染み入り、縛られた突起を僅かに大きくさせた。

河童は愉快そうに、乳房に繋がった糸を小刻みに動かす。

「んうっ、ひぐうっ」

悲鳴に混じって、唾液が滝のように溢れ出た。その唾液を亀頭に擦り付け、乳房を動かし自分のペニスを弄ぶ。操り人形になった乳房と乳首から注がれる快楽は、尻穴に集束された不感の呪術を中和させつつあった。絶頂してしまうと、不感の呪術は完全に壊されてしまうだろう。

「あぐっ、ぶううっ、ふぐうう！」

乳房を弄んだ河童は、性器を引き抜き、そつとクリトリスに触れた。快楽の限界に達していた身体が異なる刺激を受け、遂に達してしまった。不感の呪術が施されていない場所での絶頂は、暴風も同然に全身を駆け抜けていく。

不感の呪術は相殺され、尻穴から垂れる精液の感触が咲彩の身体を仰け反らせる。

(や、ばい)

白目を剥いた少女を見下ろした河童が、ゆっくりと性器を尻穴へと向ける。

挿入しようとした刹那、咲彩の指が地面を搔いた。後ろ手に縛られているので動きは見て取れないが、鬼蜘蛛は慌てて指にも糸を掛ける。だが動きが封じられる直前、地面には小さな「か」の字が刻まれていた。

瞬きをした河童は、自分の性器が宙を舞う光景を見た。

続く瞬きで世界が反転し、三度目の瞬きで崩れ落ちる自分の身体を見た。

『シヤアアア』

三匹の影が河童を数千の肉塊に変え、咲彩を縛っていた糸を断ち切る。

「ぶはっ、助かった。」

はあ、はあっ。

ありがとう、カマイタチ」

口から糸の残骸を引き剥がし、傍らに鎮座する黒い影に微笑み掛ける。小型の草刈り鎌を背負った小型の四足獣が声を上げずに鳴く。神骸ではない。屋敷から持ち出した小間使い用の獣だ。屋敷では草刈りにしか使われていなかったが、咲彩は鎌に呪力を込め神骸狩りの武器としていた。

「仰向けにしたのが間違いだっただな」

独り言ち、仰向けのまま空を眺める。

終わったのか。

内心の自問に、尻から漏れ出た精液の刺激が「否」と返す。

「くそつ、好き放題に犯しやがって」

すぐにでもこの場を離れたかったが、手足は言うことを効かない。尻から漏れ出る粟立った音に反応して、僅かな痙攣を繰り返すばかりだ。既に夜は深くなっており、月が蒼白い輝きで身体を照らしている。

『おうおう、派手にやったのお』

ここへ招いてくれた神の声だった。夕刻とは異なり、今は耳に直接届いているように感じられた。不意に頭上で淡い光が灯り、アニメキャラクターを模したプラスチック面が顔を覗き込んでくる。祭りで買った物なのだろうか。改めて、神と人の距離が近い土地なのだと感心する。

起きようとする咲彩を手の動きで制し「ふむ」と顔を地面に向ける。

『神骸の気配が消えたんで様子を見に来たが、相前にやられたようだの』

現場は見えていなくとも、大地を汚す精液を見れば状況は察せられるのだろう。面を被った神は、怒るでも呆れるでもなく、労うような口調だった。神々は性交を忌むべき物とは受け取らない。

『ご苦労だったの。なんぞ褒美を取らせたいが、何かないかえ？』

「別に褒美が欲しくて来たわけじゃ」

声に活力が戻っている事に気付いた咲彩は、ゆっくりと身体を起こした。吸い込んでいた神気が、神が近付いたことで一気に活性化したのだろう。影の欠片を尻の中に滑り込ませ、漏れ出る精液を吸い上げていく。しばらく不快感に苛まれる事になるが、精液を漏らしながら歩くよりは良い。

懸念があるとすれば、性器を突き入れられたセーラ服だ。精液や唾液、腸液で汚れた服は、一目で

行為の内容が知れる。神々ならともかく、人間に自分の行為を知られるのは避けたかった。

「あの、服と違って余ってたりしませんか？」

『奉納される服は、幾つかあるが。そんな物で良いのか？』

頷くと、神は『わかった』と手を叩いた。

神域に入った時と同じように、周囲の景色が歪み身体が浮き上がる。

次の瞬間には、ローファーは硬い足音を響かせていた。

「神社の、境内か」

足音は石畳の上に降りた音のようだった。振り返ると、敷地の向こうに街の明かりが見える。背後で乾いた音が鳴った。

賽銭箱の上に、白い長方形の塊が置かれていた。振り返る前は確かに存在しなかった衣服からは、明瞭に神気が伝わってくる。服をくれると言っていたか。神様から与えられた衣服だが奉納された物だとも言っていた。手に取ってみると、確かに触り慣れた化学繊維の感触が伝わってくる。

全体を見てみようと服を広げて、映彩は笑顔のまま固まる事になった。

（わー「蹂躪少女マジカル魔法えむぴー」の服だー）

眼前にある煌びやかな衣装に、アニメの面がびたりと重ねられる。変身ヒロイン物の主人公が纏うコスプレ衣装のようだった。既製品ではなく、奉納された服を神々が仕立てた物なのだろう。

「人の世に近すぎるつてもどうなんだろう」

嘆息し、服を賽銭箱の上に置き直す。コスプレ趣味と思われようと、精液まみれの服で対面するよ

りは良い。服はぴたりと映彩の身体に合っており、丹念に仕立て直された事が分かった。

(あ、格好いいかも)

確認用の自撮り写真を見つめる。軍服を模した服は、映彩の冷たい表情と調和を見せており、それと知らなければミリタリーファッションと言い張れるような気がした。ポーズを変え、何枚かの写真を瑞樹へと送ってみる。

半ば自棄から生まれた好意的な感想は、勢いを駆って神社を出るまでの十分間。依頼人と対面し、真顔に目を覚まされるまで続くのだった。

〈二話へ続く〉